

私はかつては、このローイングという、伝統的かつ正統的なスポーツのひとつに、価値観の焦点を合わせ、誇りをもって打ち込んでいた。社会の混沌とは一線を画し、スポーツを純粋な世界、社会の不条理とは別の世界とみなし、そこに身をおくことに、ある種、自惚れた気分になっていた。

しかし、世界をあらためて見回せば、このようなスポーツに熱中してられるのは、「決して普通の状態ではないよ」と思い知らされる。少し気をつけて耳を澄ませば、ボートを漕ぐことができる水域がないとか、習慣がないといった浅い事情以前に、「スポーツどころではない」という国や地域が、そこかしこにあることを知らされる。

貧困や厳しい生活環境のなかで、日々をどう生活するか、どう生き繋ぐかが最大の課題であり、国家間の紛争や内戦、テロリズムの横行に、あるいは暴力の応酬に、身を守ること、平和を築くことがなによりも最優先の問題であり、あるいは深刻な環境汚染や人心の荒廃に蝕まれていたりする。

平和への流れが暴力の衝突に取って代われようとしている。お互いに密接かつ複雑に絡まりながら、事態は良い方向へ動いているようには見られない。世界の人々が、平和で理想的な未来を描くことに、不安や困難さを感じる時代になってきている。



投石を受け、顔面から血を流しながらも、幼児をかばいパキスタン領内に逃げ込むアフガンの難民女性（毎日新聞 2001.11.24/12A/p.27）

このような事態において、ローイングするということが、自分に突きつけた問いは、「そうやってボートを漕いでいて良いのか？」ということだった。つきつめて言えば、厳しい紛争や自然の中で生き繋いでいる人たちと、ローイングの場を同時に同じ場所に並べたときに、はたして漕いでられるのか？ということだった。もし同じ場所がないことだけを頼りに、まがりなりにも平和で経済的に恵まれた国の中だけで楽しんでいるのだとすれば、それは本当にそれで良いのか？

スポーツという世界だけを尺度にすれば、例えばオリンピック

このマニュアルで安易に技術のみをテイクして欲しくない。ローイングに真剣に取り組むとは、勝利へベストを尽くすというだけのことではなく、その体験を通じて、あなたがどう人生を送り、どう社会に関わるのかが問われている。

で世界中の国が集まったとか、欧米諸国にくらべ日本はまだまだとか、金メダルの数も減ったとか、それはそれで、現実のひとつではあるのだけれど。しかしまず、とりあえず、スポーツにボートに打ち込めることができる環境にあることに、私たちは先駆の労苦に感謝しなければならない。この、たかがスポーツができるという環境さえ、非常に華奢なバランスの上の、つかの間のパラダイスかもしれないのだから。しかしスポーツを楽しむことさえ難しい人たちがいることを、常に、決して忘れてはいけない。だけれども、ここで私がいいたいのは、「だから感謝して、ローイングというスポーツに打ち込め」ということではない。

言いたいのは、スポーツやローイングだけが、世間から隔絶して、純粋な孤高の世界というわけではないということ。すべては、連携している。だからこそ、ローイングをすること、あるいはその取り組みの姿勢を、世界とのつながりの中で意識し、形作ってほしいということだ。

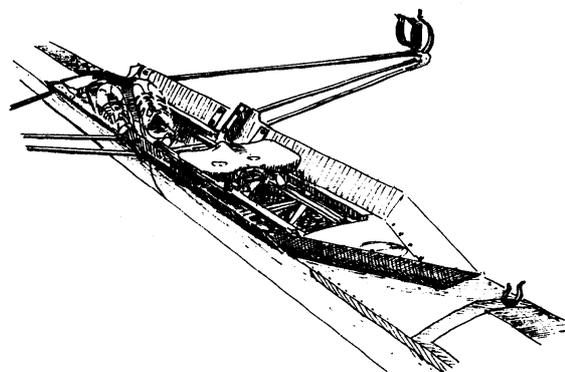
私たちが、このスポーツにどのような姿勢で取り組むのか、どのようなムーブメントを展開するのか、ということに、決して安易になってほしくはない。ただ単に、楽しいからだとか、競いあうことや勝利追求の動機「だけで」結論づけるのではなく、あなた自身のかげがえのない、大切な人生の過ごし方の一部として、あるいは同時代を生き抜く世界中の多様な生き様の一人として、このスポーツに真剣にとりこんでほしい。

ローイングへの取り組み方が、あなたの生活と人生に影響し、あなたの家族や社会へ、次の世代へ影響を与える。

あなたがとらえたワンストロークのなかの水の1分子は、戦争でわが子を失った母親の涙の一滴から受け継がれ、いつか砂漠に恵みの雨の一滴に含まれるのかもしれない。あなたが流した汗の一滴が… だから。

このスポーツをするという行動を通して、あなたの人生の中で、この現代の社会と、そして未来の世界に、あなたがどう生きるかを問われている。真剣に、少なくともまじめに（ふざけないで）ローイングをしてほしいのだ。真剣さとは、ただ勝利のためにベストを尽くせということとはすでに別の次元の話である、ということに気をつけてほしい。

このマニュアルは、主にローイングの技術的側面に焦点をあてて記述している。しかしむしろ、本当に伝えたいのは、どうローイングをするか、どうコーチングをするかの姿勢について聞きたいのだ、ということを理解してほしい。



漕ぐことで自分がどう変わるのか？